

特別展 没後100年記念 住友春翠
— 仕合せの住友近代美術コレクション

富豪は二重の人格を持つ。



Anniversary of the Passing of
SUMITOMO



住友春翠

仕合せの住友近代美術コレクション



東京 泉屋博古館

【開館時間】 11:00～18:00 *金曜日は19:00まで開館 *入館は閉館の30分前まで
 【休館日】 月曜日、9月24日(木) *9月21日(月・祝)、10月12日(月・祝)は開館
 【入館料】 一般 1,500円(1,300円)、学生 800円(700円)、18歳以下 無料
 *学生・18歳以下の方は証明書のご提示が必要です *20名様以上の団体のかたは()内の割引料金
 *障がい者手帳等をご提示のかたはご本人および同伴者1名まで無料
 *本展2日目のご来館時にチケットの半券をご提示で1名様1回限り半額
 【主催】 公益財団法人泉屋博古館、日本経済新聞社

8.29^{SAT} → 10.12^{MON}

2026 前期 8.29(土) - 9.23(水・祝) 後期 9.25(金) - 10.12(月・祝)

Fortunate Encounters of the Sumitomo Modern Art Collection

2026.8.29 (sat) - 10.12(mon)

Special Exhibition

100th Anniversary of the Passing of SUMITOMO Shunsui:
Fortunate Encounters of The Sumitomo Modern Art Collection

《展覧会概要》

作品が収蔵されるとき、その一つひとつにはそれぞれの物語があります。それは「いつ」「どこで」「誰が」「何を」「なぜ」「どのように」手に入れたのか—住友コレクションは、中国古代青銅器をはじめ、中国・日本書画、西洋絵画、近代陶磁器、茶道具、文房具、さらには能面・能装束など幅広い領域にわたりますが、その多くは、現在の住友グループの礎を築いた住友家第15代当主・住友吉左衛門友純（ともい）（号：春翠、1864～1926）によって明治中頃から大正時代にかけて買い求められたものです。

住友家須磨別邸を訪れた洋画家・小杉未醒（みせい）は、春翠の印象について「富豪は二重の人格を持つ、一つは富豪其人の人格、一は其の家の人格」と述べています。春翠が手に入れた作品にもまた、「家」と「私」というふたつの意識がその根底に流れています。もっとも、「家」と「私」は明確に区分できるのではなく、「家」のなかの「私」、あるいは「私」のなかの「家」があり、淡水と鹹水が混ざり合う汽水域のように、「家」と「私」とが交錯する独自の価値観のもと、このコレクションは形成されていきました。

本展は、住友春翠の没後100年を記念し、春翠が関心を寄せた近代美術を紹介するものです。同時代を生きた作り手たちとの交流を通じて、春翠が何をまなざし、何を求めたのか。本展では、春翠と作品とのめぐり合わせ（＝仕合せ）を時系列順に辿りながら、その美意識を見つめなおすとともに、収集の背景や時代性といった視点からコレクション形成史を再考する機会とします。

《基本情報》

展覧会名 特別展 没後100年記念 住友春翠—仕合せの住友近代美術コレクション

会 期 2026年8月29日(土)～10月12日(月・祝) ＊会期中展示替えあり

前期：8月29日(土)～9月23日(水・祝)、後期：9月25日(金)～10月12日(月・祝)

開館時間 11:00～18:00 ※金曜日は19:00まで開館 ※入館は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日、9/24(木) (9/21・22・23、10/12は開館)

入 館 料 一般1,500円(1,200円)、学生800円(700円)、18歳以下無料

※学生・18歳以下のかたは証明書のご呈示が必要です

※20名様以上の団体は()内の割引料金

※障がい者手帳等ご呈示の方はご本人および同伴者1名まで無料

※会期中の2回目入館は半券提示にて半額

会 場 泉屋博古館東京

〒106-0032 東京都港区六本木1-5-1

<https://sen-oku.or.jp/tokyo/> TEL:050-5541-8600(ハローダイヤル)

主 催 公益財団法人泉屋博古館、日本経済新聞社

巡 回 泉屋博古館（京都東山・鹿ヶ谷）2026年10月31日(土)～12月20日(日)

《本展のみどころ》

1 近代美術コレクションの代表作と、再会するコレクションたち

春翠の好みはしばしば「典雅清淡」と称されますが、確かに現在遺されている作品の数々は格調高く、そして清らかな趣をたたえています。本展では日本画や洋画、そして工芸まで、春翠のもとに集まった当代美術を一挙公開し、作品を通じてその美意識の在りかをご覧ください。また当時、関連会社や個人への寄贈により、春翠は自身が収蔵した作品の一部を手放しています。本展では、住友が旧蔵した作品を併せてご紹介し、当時の収集について復元的に検証します。



藤島武二《幸ある朝》
明治41年（1908）
泉屋博古館東京

2 クロニクルで魅せるコレクションの軌跡

本展は、春翠の経歴と作品購入の歴史を時系列順に紹介します。新しい試みとして、会場の壁面には年表のように各年の出来事を掲示し、またその事蹟と紐づくかたちでコレクション形成の諸相をご紹介します。春翠の足跡と収集の軌跡を歩きながらたどることができる展示を目指します。



上島鳳山
《十二ヵ月美人》のうち
「九月 菊花」
明治42年（1909）
泉屋博古館東京

3 同時代作家たちとの交流

洋画家・鹿子木孟郎（かのこぎたけしろう）のパリ留学費用の資金援助に代表されるように、春翠は美術の庇護者として積極的に同時代の作家や美術団体を支援しました。また春翠が嗜んだ茶の湯を通じた交流、あるいは自ら筆を執り、気心の知れた画家とともに席画に興じるなど、春翠は作家とパトロンの垣根を超え、同時代の作家と親しく交流を結んでいます。展覧会では、春翠が買い求めた作品をご覧いただくとともに春翠と作家のエピソードを紹介します。



板谷波山
《葆光彩磁珍果文花瓶》
重要文化財
大正6年（1917）
泉屋博古館東京

《展示構成》

序章「住友春翠」になるまで

住友春翠（幼名・徳大寺隆麿(とくだいじたかまろ)）は、幕末の京都において清華家(せいがけ)の名門・徳大寺家の第五子として生まれました。徳大寺家は藤原北家閑院流(かんいんりゅう)に属し、中世以来、朝廷の中枢を担ってきた公家です。父の徳大寺公純(きんいと)は幕末の朝廷政治に深く関わった公卿であり、兄には明治天皇の侍従長を務めた徳大寺実則(さねつね)や、二度首相を務めた西園寺公望がいます。春翠は幼少期に、厳格な父から漢学や国学などの学問に加え、書画、和歌、茶の湯、能楽など公家文化の幅広い教養を学び、伝統的な価値観と美意識を身につけていきました。一方で、年の離れた兄西園寺からは、欧米文化への柔軟な姿勢や中国文人趣味の影響を受けています。

対照的なふたりから得た学びは、後年「春翠」の精神的基盤を形成する土壌となり、それは大正15年（1926）に63年の生涯を閉じるまで、一貫して春翠の行動と価値観を支え続けました。明治25年（1892）に徳大寺から住友家へ入り、公家社会から大阪の実業界へと活動の場を移した後も、その根底には徳大寺家から継承した伝統や家風と、公望がもたらした柔軟性と先進性が息づき、住友コレクション形成にも大きな影響を与えることとなりました。

第1章 ノブレス・オブリージュの目覚め 明治25～36年、28～39歳

明治16年（1883）に父を亡くした春翠は、翌年上京して学習院に学びました。学業・人格ともに高く評価され、在学中の明治25年（1892）に住友家から見初められ、婿養子として入家することになりました。翌年には家督を継承し、別子銅山の近代化や煙害問題など、住友家が直面する重要課題の解決に尽力しています。

また明治30年（1897）には約8か月にわたる欧米視察を行い、先進的な企業経営や実業家の社会的役割を学びました。とりわけ事業の利益を社会へ還元する欧米実業家の姿勢（ノブレス・オブリージュ）は春翠に大きな影響を与え、その後の社会貢献や文化支援を志す契機となりました。実際に明治36年（1903）には第5回内国勸業博覧会の協賛会会長・評議員を務め、博覧会を成功に導くとともに、開催地である大阪市の発展にも大きく貢献しています。

この頃、日本画では田能村直入(たのむらちよくにゅう)や村田香谷(むらたこうこく)など京阪の大家をはじめ、東京画壇の重鎮であった橋本雅邦(はしもとがほう)らの作品を購入しています。また洋画では欧米視察中に購入したモネ作品のほか、兄西園寺の助言を受けて黒田清輝や山本芳翠ら日本の洋画家を支援したことが注目されます。さらに博覧会を契機に近代工芸品の収集にも力を注ぎ、それらは明治36年に完成した須磨別邸を彩りました。



クロード・モネ 《モンソー公園》1876年
泉屋博古館東京

《展示構成》

第1章 ノブレス・オブリージュの目覚め 明治25～36年、29～40歳



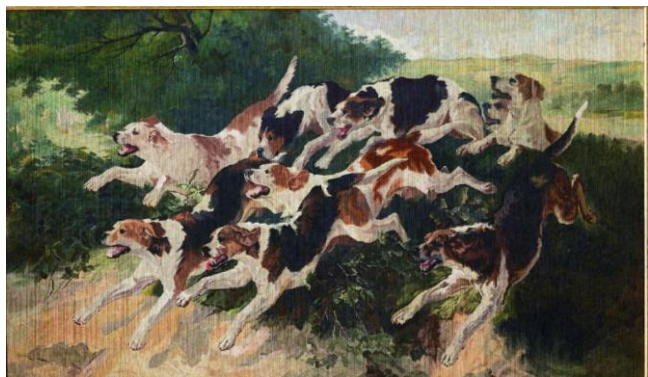
畑仙齡《大塔彩色之図》
明治31（1898）年
泉屋博古館東京



原田西湖《乾坤再明図》
明治36（1903）年
泉屋博古館東京



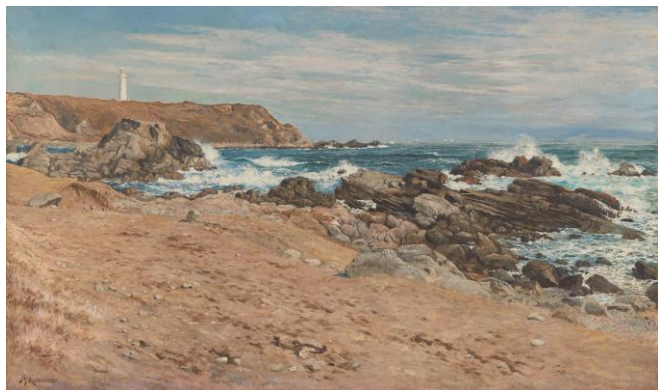
二代井上良斎
《巖上白鷺置物》
明治36（1903）年頃
泉屋博古館東京



二代川島甚兵衛《獵犬図》
明治43（1910）年頃
泉屋博古館東京



池田泰真《野菜盛籠図額》
明治36（1903）年頃
泉屋博古館東京



河久保正名《海岸燈台之図》
明治35（1902）年
泉屋博古館東京



景観模型工房製作
《住友家須磨別邸模型》
泉屋博古館

《展示構成》

第2章 フィランソロピーの実践

明治37～大正4年、40～51歳

明治36年（1903）、須磨別邸を完成させた住友春翠は、続いて約280年にわたり住友家の本邸であった鰻谷（うなぎだに）邸に代わる新たな本邸の建設に着手しました。大阪・茶臼山に築かれた本邸は大正4年（1915）にほぼ完成し、春翠は自ら現場で指示を重ねるなど強い情熱を注ぎました。この築邸は美術品蒐集にも大きな影響を与え、近代和風建築にふさわしい作品が選ばれました。表書院には狩野芳崖（かのうほうがい）の大作が掛けられ、木島櫻谷（このしまおうこく）や香田勝太（こうだかつた）には新邸のための屏風制作が依頼されるなど、邸宅と美術が一体となった空間が創り上げられました。

一方、欧米視察で実業家による文化支援に感銘を受けた春翠は、明治37年（1904）に大阪図書館（現大阪府立中之島図書館）の建設費と図書購入基金を一括寄付しています。さらに明治40年代には大阪に美術館を新設する構想を抱き、その実現を見据えて文展や異画会に出品された大作を積極的に購入していきました。このように、この時期の購入は、新築の本邸を飾る調度品の購入という実用的な側面に加え、地域の文化振興を目指した新美術館構想など、個人の趣味嗜好の範疇を超え、様々な目的を帯びていた点が特筆されます。



狩野芳崖《寿老人図》
明治10年代前半
（1880年代前半）頃
泉屋博古館東京



山崎朝雲《竹林の山濤》
大正元年（1912）
泉屋博古館東京



山下新太郎《読書の後》
明治41年（1908）
泉屋博古館東京



迎田秋悦《秋草時絵硯箱》
大正時代・20世紀
泉屋博古館東京



尾竹竹坡《九冠鳥》
明治45年（1912）
泉屋博古館東京
＊後期展示

《展示構成》

第2章 フィランソロピーの実践

明治37～大正4年、40～51歳



香田勝太
《春秋草花図》
大正6～7年
(1917～18)
泉屋博古館東京
＊前期展示

第3章 「家」と「私」を貫くもの

大正5～15年、52～62歳

大正4年（1915）に住友家の本邸となった茶臼山邸は、その後も増改築が続けられ、大正8年（1919）にようやく工事が完了しました。しかし完成からわずか2年後、春翠は美術館の設置を条件として広大な敷地を大阪市へ寄付します。これは、大阪市が美術館用地を求めていたことに加え、長年にわたり大阪に美術館を設立することを願ってきた春翠の理想と合致するものでした。

晩年の春翠は、余暇を見つけては自ら書画に筆を執る静かな日々を過ごしました。この頃の春翠は、展覧会での作品購入を次第に減らし、信頼を置く作家たちとの交流を深めていきました。なかでも茶臼山邸の表具を手がけた井口邨僊(いぐちそんせん)（井口古今堂(こきんどう)三代目）との関係を通じて、望月玉溪(もちづきぎょっけい)や上田耕甫(うえだこうほ)らの作品を多く収集しています。これらの作品は、瀟洒で格調高い趣を備え、公家出身の春翠の美意識にかなうものでした。また、彼らは園遊会や宴席の場で席画を担うなど重用され、さらには茶の湯や能といった共通の趣味を愉しむ文雅の友でもありました。こうした関係のなかで手に入れた作品には、「家」としてあるべき姿と「私」の感性が重なり合い、春翠の人とその美意識が色濃く映し出されています。



宮川香山
《菊花形藤花図壺》
明治39年（1906）
泉屋博古館東京



住友春翠、伊藤陶山、
山田秋坪、渡辺花仙、
井口邨僊
《白磁四君子画花瓶》
大正6～9年頃（c.1917～20）
泉屋博古館東京



山田秋坪
《柘榴花白鸚鵡図》
大正9年（1920）
泉屋博古館東京

《貸出可能画像・キャプション一覧》

片隻、片幅、部分図掲載の際は、
作品名の後に（右隻）等付記くださいますようお願いいたします

	クロード・モネ 《モンソー公園》 1876年 泉屋博古館東京		藤島武二 《幸ある朝》 明治41年（1908） 泉屋博古館東京
 （左隻）	 （右隻）	 （左隻部分）	尾竹竹坡 《九冠鳥》 明治45年（1912） 泉屋博古館東京
 （左隻）	 （右隻）	香田勝太 《春秋草花図》 大正6～7年 （1917～18） 泉屋博古館東京	
	上島鳳山 《十二ヵ月美人》のうち 「九月 菊花」 明治42年（1909） 泉屋博古館東京		板谷波山 《葆光彩磁珍果文花瓶》 重要文化財 大正6年（1917） 泉屋博古館東京
	迎田秋悦 《秋草蒔絵硯箱》 大正時代・20世紀 泉屋博古館東京		山崎朝雲 《竹林の山濤》 大正元年（1912） 泉屋博古館東京

画像ダウンロード（ARTPR）URL：<https://www.artpr.jp/senoku-tokyo/shunsui100th>

《お問い合わせ先》

QRコードはこちら▷▷



泉屋博古館東京

展覧会担当：椎野晃史（泉屋博古館東京 主任学芸員）

広報担当：橋本旦子 TEL: 03-3584-8136 FAX: 03-3584-8137

E-mail：pr-tokyo@sen-oku.or.jp